

宗教心理学研究会ニューズレター

第6号 2007.2.20

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

| | | | |
|---------------|----|------|----|
| 第4回研究発表会報告 | 報告 | 松田茶茶 | 1 |
| 学会報告 | | 森岡正芳 | 6 |
| 第4回研究発表会に参加して | | 川島大輔 | 8 |
| 第4回研究発表会に参加して | | 浦田 悠 | 9 |
| 第4回研究発表会に参加して | | 松田茶茶 | 10 |
| 事務局からのお知らせ | | | 12 |

第4回研究発表会報告

報告 松田茶茶(神戸学院大学大学院)

2006年11月3日(金)15:30~17:30, 福岡国際会議場にて第4回研究発表会「宗教心理学的研究の展開(4)—心理学に根ざし, 社会寄与を目指すには—」がおこなわれた。大会初日であり, 福岡での開催ということもあったが, 本研究会の会員以外にも20名ほどの参加者がみられた。

まず松田(神戸学院大学大学院)より開会宣言ならびに本研究会の紹介がなされ, 西脇先生(南山大学)による発表者の紹介に続き, 各先生方からの発表がおこなわれた。

1. 話題提供

1-1. 「パーソナリティと宗教—5因子モデル(FFM)から—」: 藤島寛先生(甲南女子大学)

パーソナリティの5因子モデルの研究はCosta & McCrae(1992)に代表され, ①外向性, ②調和性, ③誠実性, ④神経症傾向, ⑤(経験への)開放性という5つの特性から人格を記述するものである。そこで今回は, 宗教に関連する部分がこの5因子によってどう記述されるか, その発展性や

限界について話をしたいと考えている。

Saroglou(2002)は宗教性・霊性を4つのカテゴリー—(①宗教性<Religiosity>, ②成熟した宗教と霊性<Open, mature religion and spirituality>, ③宗教的原理主義<Religious fundamentalism>, ④世俗的宗教<Extrinsic religion>)に分類し, FFMとの関連性についてメタ分析をおこなっているが, どの変数間をとってみても非常に低い相関しか示していない。しかしながらこのことは, 宗教性は実存的な次元で必要のないものであるということの意味するものではない。

宗教というものは世界中のあらゆる場所に存在し, 人間が生きる上での重要性を認められているにもかかわらず, なぜこのような分析結果が出るのかということについて考えると, Costa & McCraeのFFM研究は生物学的基盤に基づいた因子であり, 宗教性は必ずしもそうではないということが大きな原因であると考えられる。Piedmont(1999)の研究では, 第6因子として宗教性に関する

る因子が抽出されているが、それ以外の5因子はFFMの5因子とまったく一致するわけではなく、この研究の妥当性についてはCosta & McCraeが批判的に指摘している。そのように、宗教的次元をFFMの因子と同じように属性的・定性的・生物学的なものとして捉えることができるか否かについてはまだ議論の余地はあるが、しかし無理ではないかと考えている。やはり状況的な因子として扱うか、あるいは生きていくために必要な表現として意味があるのではないかと考えるのが、尺度構成の立場から言えることである。

宗教的コーピングの研究が2000年以降にストレス・コーピングやメンタル・ヘルスの領域でみられるようになってきており、まだ色々な問題がありはするものの、状況変数あるいはバッファ変数としては無視できない。例えば、膨大な蓄積をもつコーピング研究の中にCOPE(Carver, et al, 1989)というものがあり、その中には“宗教への志向(Turning to religion)”という因子がある。ところがそれとFFMとの関連性をみると相関は非常に低く、この因子はコーピング方略としては成熟したものではないと言える。しかし、FFMの因子のもつ特性から考えると、宗教的なコーピングは現実的な解決手段の一つとしてとられていると考えるほうが良いかもしれない。

宗教的因子が生物学的基盤に基づく必要性については、genotypeであるという証明ができないとするならばphenotype(性格的適応)であろうと考え検討することができる。宗教への志向がコーピングのバリエーションの一つであると考えるとき、そこには文化的影響や状況的影響があり、それに対しては量的なアプローチは無理であり、一人ひとりの人生の物語(ナラティブ)との関連が当然あると考えられる。

サンプリングについても問題は山積しており、大学生ばかりを対象に調査するのではなく、死を間近にひかえた患者や、特定の病気にかかっている人など、あらゆる対象者を範疇に入れていく必要がある。

最後に自身の研究(藤島, 2002, 2003)を紹介する。Moberg(1984)と金児(1991)の研究を参考にしながら、自由記述により集めた項目と合わせて土台にし、宗教性を含む人生観尺度を作成した。

6因子、46項目により構成され、6因子はそれぞれ、①主観的幸福感、②西洋的宗教観、③人間中心主義、④日本的信仰、⑤利己的満足感、⑥感覚的一体感、となった。学生、成人前期、成人後期を対象にこの尺度を2回実施した結果、1回目では発達段階が上がるにつれ、西洋的宗教観は高くなり、人間中心主義は低くなっていくことが示された。2回目では発達段階が上がるにつれ、西洋的宗教観は高くなり、利己的満足感は低くなっていくことが分かった。すなわち、死に向かって進むほど利己性が弱まると言える。しかし結果の普遍性について言及するには、サンプルに関する工夫がまだまだ必要である。

1-2. 「生と死を結ぶ宗教という物語—浄土真宗をフィールドとした調査からの一報告—」:川島大輔先生(京都大学大学院)

高齢化の著しいわが国では、死を巡る問題についての議論が活発化してきている。高齢者が死というものを考えるときに、宗教がどのように関わってくるのかについて考えると、宗教は死の問題に対して、死後の理想世界を提供するという役割をもって貢献してきた。そこで、死後の理想世界とはどのようなものであるか、それぞれの宗教によるバリエーションや共通性にはどのようなものがあるか、死後の理想世界を自分の物語として捉えることにはどのような意味があるのかといった点が問いとして浮かぶ。

死に関して最も重要な問題は、岸本(1973)も述べるとおり、死に対する恐怖である。それに対し、死後も天国あるいは極楽浄土において自らが存在し続けるという物語を宗教が提供することによって、その恐怖が緩和されている。実証的な知見としては金児(1995)や河合・下仲・中里(1996)などが挙げられる。

インタビュー調査をしていく中で、自分自身が存在し続けることよりも、「また会える」あるいは「待っていてくれる」という、死後も誰か他の人とつながっているという感覚が非常に重要なのではないかと思うようになってきた。もちろんこれは、自己が続いているという感覚と密接に関連してはいるが、それよりもむしろ、自己と他者との関係性というものが特徴的で面白く、大事なことではないかと思う。しかし、一人称の死に関する

物語の中にみられる死者と生者を結ぶ機能については、日本では未だほとんど検討されてきていないという現状がある。

物語とは何かという定義の問題については、やまだ(2006)の「文化の物語を原典にして、それを引用しながら、私ヴァージョンに語りなおす作業」に従っている。その上で、①死後の理想世界という物語が死者と生者をどのように結びつけるのか、②宗教が死後の理想世界という物語にどのように組み込まれることで、その機能を果たすのか、という2点について考察したことを今回は紹介する。

質的研究では特徴的で典型的なサンプリングを実施することが必要(能智, 2004)ということから、浄土真宗僧侶への調査をおこなっている。実施に際してはインタビューガイドを作成し半構造化インタビューをおこなっており、分析はKJ法に基づいている。結果、大きく5つの意味のまとまりが抽出され、それぞれ①死者と生者との物語の共有、②先立ったものとの関わり、③自己の死にかかわる倶会一処の多様な意味づけ、④遺されるものへの関わり、⑤困難な状況、となった。

“死者と生者との物語の共有”は、「死は永遠の別れではなく、再び会える」という意味づけであり、この考えによって悲しみに囚われることがなくなるという。またこの考えは、“先立ったものとの関わり”、“自己の死に関わる倶会一処の多様な意味づけ”、“遺されるものへの関わり”の根拠となる語りである。

“先立ったものとの関わり”は、二人称の死から出てきた語りで、最も典型的な物語の語りなおしである。遺されるものが、亡くなっていくものとともに念仏を唱える中で、「喜んで浄土に参らせてもらう」と思うようになり、それにより「往生浄土は間違いない」と安心できる。しかし一方で、「そうは思えない」という語りもあり、往生浄土は間違いないと確信しているが、また会えるという保証にはならないと考える人もいる。

“自己の死にかかわる倶会一処の多様な意味づけ”は、「自らが死んだ後、先立った人にまた会える」という意味づけであり、肉親の死の体験などをとおして葛藤が生じることもあるが、年齢を重ねることで次第に整合性が高まり、ここに発達の

道筋がみられる。

自己の死に対しても他者の死に対しても「また会える」という考えを採用していない人には、「死者と生者は深いところでつながっているが、倶会一処は一つの方便なのだ」という語りがみられ、これは倶会一処という聖なる物語の、現代における新しいヴァージョンとして捉えることができる。

“遺されるものへの関わり”は、「浄土でともに出会える」という意味づけにより先立ったものと死に逝く自らを結び、さらに自らの死後に遺されるものをも結ぶという流れである。つまり遺される家族に対して倶会一処の考えをどのように当てはめるかという問題であり、家族に向かって直接的に語るのではなく、普段の生活の中で何となく暗黙のうちに感じ取っているというパターンがみられる。この部分に関しては、今後さらなる研究の積み重ねが必要である。

“困難な状況”は、死者をみなで囲むというような、死に触れる機会が減少していくに伴って、物語を共有する機会も減ってきており、「ともに出会える」という意味づけの成就が難しくなっていることを表している。

このように様々なヴァージョンがみられたが、特に“先立ったものとの関わり”と“遺されるものへの関わり”は、似たような言語的表現がされていてもその内実は異なっており、現実におけるその相手との関係性と非常に深く関わっていると考えられる。

1-3. 「宗教と心理療法・カウンセリングの「心の支え」をめぐる役割分担」: 徳田英次先生(桐蔭横浜大学)

もともと宗教が担っていた病気や死に対する不安への対処を、現在では心理療法が担ってきているという状況があるが、取って代わっているわけではなく、また取って代わるべきではないのかもしれない。宗教から心理療法へ移ってきて、扱い方によっては再び宗教へ戻るということもあり、そのことから、それぞれに役割分担、あるいは自制すべき点があるのではないかと考えられる。そこで、心の支えや苦悩からの癒しを求める人が、宗教と心理療法をどのように使い分けているのかを、宗教心理学的理解を手がかりに検討していく。その際、宗教心理学的理解については金

児(1997)の日本人の宗教観を用いて見ていくこととする。なお、金児(1997)は日本人の宗教観を①向宗教性、②加護観念(オカゲ)、③靈魂観念(タタリ)という3側面で説明しており、向宗教性は“信仰意識”、加護観念と靈魂観念は“靈性意識”にあたるとしている。

実際の調査データで大学生の宗教観を示すと、宗教観のそれぞれの次元の素点は、向宗教性が1.64、加護観念が2.34、靈魂観念が2.88であった。向宗教性からは、大学生においては宗教への信仰がほとんどみられないということが言え、加護観念はちょうど中間、靈魂観念は賛成に近い意見をもつ人が多いということが分かる。つまり大学生は、信仰に対しては価値をおいていないが、死後の世界や靈魂といったものに対しては受け入れ信じているということである。

GHQ28(General Health Questionnaire 28;精神健康調査票)との相関をとると、加護観念と靈魂観念は比較的似通った傾向を示しているが、加護観念と精神的不健康との間には-.13という低い負の相関がみられ、靈魂観念と不安と不眠との間には.19という正の相関がみられた。これは精神的健康に対して、加護観念はポジティブに、靈魂観念はネガティブに働いていることを表している。そこで加護観念と靈魂観念の差をとり、それと精神的健康との相関をとって見たところ、-.22という負の相関がみられ、加護観念は強いけれども靈魂観念は弱い人は精神的に健康、加護観念は弱いけれども靈魂観念は強い人は精神的に不健康、ということが分かった。

EPSI(Erikson Psychosocial Stage Inventory; エリクソン心理社会的段階目録)の自己確立との相関をとると、加護観念と自己確立との間に.29という正の相関がみられ、加護観念が強いと自己確立が高いということが分かる。

TCI(Temperament and Character Inventory)との相関をとると、加護観念と靈魂観念は協調志向や自己超越との間に比較的強い正の相関を示したが、向宗教性は自己超越との間には相関を示さなかった。このことから、向宗教性は他の2つとは質の異なるものであることが分かる。

なお、TCIとGHQとの相関をとると、自己志向の高い人は精神的な健康度が高い、協調志向が高

い人は抑うつ度が低い、というようなことが分かる。

悩みを抱えたときに、宗教と心理療法のどちらに頼るのかについて、理由とともに大学生に尋ねたところ、宗教を選択した人は78名中11名で、理由については「家族で信仰しているから」と答える人が多く、「人に話したり頼ったりすることが必要だから」と答える人も何人かいた。なお、このうちの6名は宗教と心理療法を両方選択している。心理療法のみを選択した人は42名で、その理由には「科学的、医学的に根拠があるから」、「効率性が高いから」というものの一方で、「宗教に対する嫌悪感や不信感があるから」、「宗教に無関心だから」、「自己喪失の脅威をもっている」というものもあった。どちらも選ばない人は25名で、「自分の問題は自分で解決すべきだ」という理由が多かった。

以上のデータをまとめると、大学生においては、①靈魂観念は高いが向宗教性は低い、②向宗教性と加護観念・靈魂観念は質が異なっている、③加護観念は精神的健康と、靈魂観念は精神的不健康とそれぞれ関連している、④加護観念はエリクソンの自己確立、TCIの自己志向・協調志向と関連している、⑤信仰に救いを求めるのは、家族やその共同体が信仰を共有する場合である、ということが言える。

実際の臨床現場で関わる事例から検討したことを提示すると、催眠療法に来談する中には占い師から紹介されて来る人が多く、また死などについて悩んで来る人も多くみられる。...(3事例の紹介がなされたが、事例の具体的な記載は省略)...こういったケースの中では、向宗教性を高めるのではなく、加護観念を高めるための働きかけが有効であると感じられる。

以上の全内容をまとめると、①加護観念と靈魂観念は、靈性意識のポジティブ側面とネガティブ側面を表している、②靈性意識が高く、中でも靈魂観念を強くもつが向宗教性は低い人は心理療法に癒しを求める、③靈性意識が高いクライアントに対する臨床心理学的援助では、向宗教性を高めるのではなく加護観念を高めるように働きかけることが、倫理的な問題も少なく、有効なのではないか、④宗教心理学的理解は、宗教側で

はなくユーザー側からの宗教意識を明らかにするものであるため、臨床心理学的援助をおこなう上で有用である、ということが言える。

2. 指定討論：森岡正芳先生(奈良女子大学)

①[藤島先生へ]パーソナリティにおいて、宗教的な次元、スピリチュアリティな次元とは何か、という問いがまず最初に浮かぶ。5因子モデルをもとにして考えており、結果から見ると生物学的なレベルでの宗教的次元は出しにくく、生きるための表現として捉えているが、例えば児童の宗教心性や青年期の宗教パーソナリティとの連関において、今の研究がどうつながっていくのかについて、心理学の立場からもう少し聞きたい。

②[川島先生へ]ナラティブ・アプローチの原点は宗教であるため、ナラティブが宗教研究に馴染みやすいのはもっともなことである。また、死後や未生、あるいは生まれてから数年間の記憶の乏しい期間に我々はどのような経験をしているのかという、生や死の前後についての問題には宗教が大きく関わるため、ナラティブが必要であると考えている。そこで川島先生の研究で疑問に感じるのは、宗教のプロである僧侶というドミナントな立場の人が、意外にも素直な語りを見せており、教義とは別次元で自分の言葉として語っているということである。このことをどのように解釈すれば良いのかを教えてほしい。また、そのように素直に語る場合、僧侶である自分の中に生じる疑問、揺れ、抵抗といったものがどのように現れるのかについて、もう少し話をしてほしい。

③[徳田先生へ]宗教心理学的研究が今後社会へ貢献していく中で、大きな問題となってくるものの一つにカルトの問題がある。また、トランスパーソナル系の心理療法なども流行りだし、心理療法と宗教の境界が不明瞭になってきている状況である。そのような中で気をつけなければならない重要な問題は、ユングやフロイトたちが打ち出してきた心理療法は西洋の宗教に基づいて築かれたものであり、これを我々が安易に導入してしまうと、歴史も文化も文脈背景もまったく異なるものの中で動かしてしまうこととなる、ということである。そこで、心理療法がこれだけ流行るのは、既存の宗教、ないし宗教性やスピリチュアリティが衰退しているからなのか、意見を聞きたい。

3. 指定討論へのリプライ

3-1. 藤島先生より

成熟した宗教性というものを記述するときには、開放性が強いという前提が必要となる。また、エリクソンの研究に匹敵させるようなレベルでの宗教性パーソナリティ記述の研究ができるか否か、難しい課題である。そこで方法論として、ナラティブには非常に大きな有用性があり、このナラティブと、特性論に基づいたプロフィール記述の両方を用いて、全体を何とか表現するやり方はないだろうか、と現在探索中である。5因子では足りないということは明らかであり、現在、ケンブリッジではヘキサ法と呼ばれる6因子解が優勢になってきており、その第6因子がいわゆる“人間性”のような因子である。これが宗教性に関連するのか否かを検討することで、今までよりも進んだ知見が得られることを期待している。

3-2. 川島先生より

語りが意外と素直だということに関しては、浄土真宗であるということが大きく関わっていると考えられる。浄土真宗の中で、「自分は凡徒であり、色んなことができない、正しくものを見ることができない」という思いがあるからこそ、教義をうまく理解できない自分というものが比較的語りやすいのではないかと思う。また、オルタナティブとドミナントをつなげていくことが社会的寄与につながると考えているが、僧侶自身にとっても、つながらないということが大きな葛藤になっており、逆に教えてほしいと言う人もいる。そのため語りの中で素直な感情が出てきたり、また門徒に対して教義を説くときにもうまく伝えられないという悩みを吐露したりすることもあり、そうしてインタビューに対して自分の体験を交えて話すことが、浄土真宗を広めていくことにつながるのではないかも考えて、素直に語っているのではないかと思う。

3-1. 徳田先生より

既存の宗教の衰退と、今日発表した研究内容との間にどのような関係があるのかについては、教義ができた時代と今の時代は違うため、教義がナラティブであるとすると、ナラティブに同化できない人が多いように感じる。しかし靈魂観念というものはまだ色濃く残っており、自分に都合の

良いものを求めていて、強力な体験を欲しているように思える。また、自己超越と加護観念および靈魂観念との関連性が高いということを話したが、催眠へのかかりやすさと自己超越との関連は非常に強く、もし催眠を靈魂観念の強い人に用いたときには、その体験に圧倒されてしまう可能性が高く、自己啓発セミナーや前世療法と同じような結果になってしまう。それに対して何か物語を作ろうとすると、それは宗教になってしまう危険性があり、そのような人には簡単に催眠による手出しができないという危惧がある。しかし法律的に見て常識的な宗教であれば、死を受容するといったことをはじめとして、利用する価値は高いと考えている。

4. フロアとの質疑応答

藤島先生に対し、「5因子では足りない。ケンブリッジでは6因子解が優勢であり、その中には人間性に関わる因子が含まれる」ということで、今後その人間性という因子の中に宗教的なもの

を求めるのか、あるいはその因子と宗教次元はまったく別の因子となるのかは分からないが、そうして因子を膨らませていくと、7因子、10因子…とさらに膨らんでいきそうな気がする。そこで、そのことに関してはどう解決を図るのかを教えてください」との質問がなされた。これに対し藤島先生より、「尺度構成という観点から言えば何因子でも良い。人間を記述するという意味においては、制限の有無は問題ではない。尺度構成においては主要な因子を抽出して説明することが目的となるため、ある意味での制限はあるが、あとは一般性と妥当性の問題であり、ナラティブであっても特性論であっても、どうすれば納得できるかが重要である。subjectiveとgeneralと対比させたとき、科学ではgeneralが必要とされるが、一方ではsubjectiveが必要とされる場合も当然あり、どのようなモデルを立てるかによる。ただ、現段階ではgeneralなものを作り上げるのは非常に難しいと感じている」とのリプライがなされた。

指定討論者から

学会報告

森岡正芳(奈良女子大学)

日本心理学会第70回大会のワークショップ「宗教心理学的研究の展開」(2006年11月3日福岡国際会議場)に出席した。今回は西脇良、松田茶茶両氏の企画によるもので、話題提供者は発表順に藤島寛、徳田英次、川島大輔の3氏であった(以下敬称略)。報告者は指定討論者としてこの場に立ち会わせていただいた。充実した時間を送らせていただいたことを感謝している。

このワークショップは連続企画で、私もここ数年のあいだに一度か二度おじゃましたことがある。心理学の立場から宗教に関わる事象を地道に解明していこうという立場に私も共感を覚えている。宗教は人類の叡智の結晶体であり、文化の中核に位置し、政治や社会を動かしてきた。しかも宗教はけっして完成態ではなく、たえず進行中の現象である。心理学もこの大きな対象に向けて寄与していくべきテーマは無尽蔵にあるはず

である。

30年も前になるが、報告者は宗教学を専攻する学生であった。その当時の心理学が宗教をテーマにすることはまず望みようがなかった。この間、臨床心理学の隆盛期が重なったことも影響するだろうが、宗教心理学の研究者がほとんど不在になり、心理学者の書いた宗教心理学のテキストが、30数年にわたって刊行されていないという日本の心理学史でもまれな時代に入っていた。そして主に宗教学の研究者が宗教心理学を思想的に研究していく立場がこの間優位となった。もちろんそれ自体とても魅力あるテーマであり、多大な成果をあげているのはいうまでもない(森岡,2006)。しかし、最近の心理学の方法論は多様化し、とくに実践領域につなぐ研究領域の展開がめざましく、心理学人口も急成長している。優秀な若手研究者が多く集まっている。このよう

に心理学世界が急変貌を始めている現在において、宗教への新たなアプローチが生じてくることは必然で、日本心理学会における「宗教心理学的研究」の毎年のワークショップは大いに期待したいところである。

さて今回のワークショップは副題に「心理学に根ざし、社会寄与を目指すには」となっており、この視点から当日の3氏の話題について若干の感想を述べておきたい。藤島の「パーソナリティと宗教—5因子モデル(FFM)から」では、長年取り組んでこられたパーソナリティの多因子モデルに関する研究手法を用いて、宗教的パーソナリティの特性が独立して取り出せるかという大胆な試みである。欧米を含む従来の研究では、宗教性、スピリチュアリティの次元と、パーソナリティの5因子とは相関が低い。前者は、パーソナリティの5因子とは異なった次元のものであることが示唆される。5因子モデルがパーソナリティの生物学的基盤にもとづいたものであるため、宗教的パーソナリティについて新しい因子として同次元におくよりも、パーソナリティのフェノタイプ、現象型としておいた方がよい。いいかえると、パーソナリティの宗教的、スピリチュアルな次元は生きるための表現としてみなされるだろう。このような藤島の手堅い方法からくる鋭い指摘は、従来の児童期や青年期の宗教パーソナリティの研究とつないでいけば、さらに創造的となるだろう。パーソナリティの宗教的な次元や傾向性はパーソナリティの根っこにあるものなのかどうかという問題に接近できるであろうし、このようなテーマこそ宗教心理学が解明すべき中核部分の一つであるからだ。

徳田の「宗教と心理療法・カウンセリングの「心の支え」をめぐる役割分担」では、徳田も宗教学を専攻後、心理療法の道に入ったとうかがい、親近感を覚えた。しかも心理療法と宗教世界共通の源泉である催眠を専門にされていると聞く。発表では、「心の支え」や「苦悩からの癒し」を求める人が、宗教と心理療法をどのように使い分けているのかという問題について、大学生の宗教観に関する調査と、心理療法の事例研究の双方向から接近する意欲的なものである。研究を主導する概念は金児(1997)の「向宗教性」と「加護観念」(おかげ)「霊魂観念」(たたり)である。心理療

法と宗教は生活場面に即してみると、その境目は危うい。私の経験でもセラピーに来られる方々でさまざまな信仰に接触を持つ人はまれではない。時代が心理療法に関心を持つのは、既存宗教の霊性が衰退しつつあるからであろう。一方、心理療法が宗教に類するものへと転じる危うさもつねに存在する。このテーマを扱う切り口は多様であろう。また周到な準備が必要であろう。

徳田は金児の概念をかりて、生活者の次元から宗教意識をとらえる。日本人の宗教観において向宗教性と、加護と霊魂の観念とは質的に異なる。後者の観念が精神の健康、不健康にそれぞれ相関が出て来るという分析は興味深い。事例研究によってこの論点はさらに明確に裏打ちされる。徳田があげた3事例ではともに、加護観念より霊魂観念が前面に出ていた。霊魂観念に直接働きかけるようなセラピーは危険であり、疑似宗教的な罠にはまる。一方、セラピーで加護観念を目標にするとこれまたますます疑似宗教化してくる。現代は、全貌が把握できないほど、種々のセラピーが日本にも持ち込まれているだけに、このような観念とセラピーの立場を基本的に区別することは倫理的にもきわめて重要である。

心理療法の理論は西洋の宗教性に関わる議論と同等に、西洋的な自我と超越者との関係の問題を背景にしている。実生活ベースの宗教意識との関連で、心理療法を進めていくときに、欧米直輸入の理論との解離は認めざるをえない。現在はむしろ文化の多層性と民族の固有性に根ざした精神医療、心理療法が注目されつつある。徳田の実践研究にはこの領域での展開を期待したい。

川島の「生と死を結ぶ宗教という物語：浄土真宗をフィールドとした調査からの一報告」は、浄土真宗の僧侶10名にインタビュー調査を行った結果からの報告である。僧侶たちが「死後の理想世界」をどのようにとらえているのか。教義の中核にある浄土、これを文化の物語ととらえ死者と生者をつなぐ物語としてどのようなはたらきをもつのかを調べる斬新な研究で、ナラティブアプローチの研究としても興味深い。

死後の理想世界(往生浄土)にて死者とふたたび会える(俱会一処)という物語は浄土系仏教に

かぎらず、多くの宗教が提供してきたドミナントストーリーである。死後そして生まれる以前(未生)について、人はたしかな根拠をもつことはできない。そこからくる根源的な不安や身近な人の死に伴う強い情動に対処するためにも、何らかの物語を必要とする。ところが現代人にとって、宗教が提供してきた大きな物語が機能しなくなってきた。ここに現代人の心の問題が潜んでいる。いいかえると一人一人が死者と生者をつなぐ物語を形づくっていく必要がある。したがって語りの意味生成のはたらきが実践的にも期待される場所である。

川島の報告では僧侶たちは「専門家」であるにもかかわらず、意外に素直に語っているのが印象的である。僧侶たちは自分に言い聞かすように語っている。死者と生者をつなぐ物語をどのように自分の言葉に織り込むか苦労されているよう

にもうかがわれる。とても人間的であるが、超越者へのゆだねという視点は僧侶たちにとっても確かなものではない。

このワークショップ全体を通じて、萌芽的な部分も含めて、宗教への心理学からのさまざまなアプローチが可能であり、十分に説得力のある根拠を示していけると思われた。それは社会への寄与という今回の副題の部分を活かし、実践的な領域を拡大していくこととともに行いたいものである。

文献

- 金児曉嗣. (1997). 日本人の宗教性:オカゲとタタリの社会心理学 新曜社
 森岡正芳. (2006). 書評 高橋原(著)『ユングの宗教論』 宗教研究80-3(350号),144-148.

話題提供者から

第4回研究発表会に参加して

川島大輔(京都大学大学院)

先の日本心理学会第4回大会では、貴重な発表の機会をいただきまことにありがとうございました。話題提供をご一緒させていただいた藤島先生、徳田先生、また貴重なご意見をいただきました森岡先生に改めてお礼申し上げます。また事前の準備から発表当日に至るまで惜しみないサポートをいただきました事務局のみなさまにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

物語と宗教の接点

近い人の死を経験したとき、あるいは重篤な病に罹ることで自らの死を痛烈に意識するとき、人は宗教や倫理の物語などの「聖なる物語」を語るといいます(やまだ, 2006)。

物語とは「文化の物語を原典にして、それを引用しながら、私ヴァージョンに語りなおす作業」(やまだ, 2006 pp.46)ですが、この作業は納得のいかない死(子どもの死や事故死など)や周囲から理解され難く公に悲嘆することが困難な死

(自殺や中絶)に直面した際にもっとも顕著にみられます。それは、人は物語る行為を通じて破壊された物語を秩序だて、自己と他者の亀裂を結びつけようとするためです。

物語が強く求められるときにその原典となるものの一つが、我々人間にとって根源的な生と死の問題について様々な物語を提供してきた宗教といえます。とくに極楽浄土という死後世界についての物語は日本人にとって馴染み深いものの一つであり、浄土で会おうという合言葉はわが国の死生観に深く関わっています。

生と死を結ぶ物語

今回発表させていただいた研究は、とくに「浄土で会える」という意味づけを巡ってなされ織り成される物語の諸相に迫ろうとしたものです。この仏教用語で俱会一処(墓石に刻まれていることが多いのでお墓参りなどで目にしたこともあるかと思ひます)と呼ばれる意味づけは、自己の連続

性や不死性の感覚をもたらすと同時に、死に逝くものと遺されるものの関係性を維持させます。これまでの研究の多くが前者に関心を寄せて、こうした死後世界についての物語と死の恐怖との関連を研究してきましたが、後者については体験記などで頻りに目にされながら十分にその内実が明らかにはされてきませんでした。研究の結果明らかとなった「還る」「往く」「会える」「一つになっていく」「繋がっている」といった結びのヴァージョンは、浄土真宗の聖なる物語の多様な引用の仕方を表すとともに、広く日本文化における死生観にも繋がるものだと思います。(詳しい研究結果については川島(印刷中)をご覧ください。)

社会的寄与を目指すために

家族との死別体験と自己の死の意味づけの結びつきから、両親などの近いものの死に逝く姿が老年期の死の意味づけや宗教の提供する物語の引用の仕方に大きな影響を与えていることが示唆されています(川島, 印刷中)。また僧侶のこうした意味づけの有様は門徒などに対する宗教的な関わりにも影響します(川島, 2004)。

この生成継承的サイクルは、死に対する関わりについての実践的示唆を提供するものです。つまりケア提供者自らがいかに聖なる物語を引用し、それをどのように他者に提供しているのかという具体的なメカニズムを提示することは、死に

逝く過程への宗教的な関わりを省察する上で重要な材料となるでしょう。また家族との死別を通じてどのように聖なる物語が語り継がれるのか、そして他者と自己のいのちをどのように結ぶのかを明らかにすることは、物語の読み手に対して一つの生き方および死に方のモデルを提示することでもあります。こうした物語を提示していく研究プロセスそのものが社会的寄与を目指したものだとはいえないでしょうか。

終わりに

心理学的見地から宗教と死の意味づけを検討した研究はとくに欧米を中心に精力的に行われていますが、わが国ではまだ十分な研究蓄積がなされていません。今後の発展を期待します。

引用文献

- 川島大輔. (2004). 終末期への宗教的関わり
の実際: 浄土真宗僧侶のライフストーリーからの探索. 教育方法の探求 (京都大学大学院
教育学研究科教育方法学講座紀要), 7, 39-47.
- 川島大輔. (印刷中). 死者と生者を結ぶ物語:
「浄土でまた会える」という意味づけを巡って.
京都大学大学院教育学研究科紀要, 53.
- やまだようこ. (2006). 喪失といのちのライフス
トーリー. 日本健康医療行動科学年報, 21, 31-4
8.

フロア出席者から

第4回研究発表会に参加して

浦田 悠(京都大学大学院)

私は、今回はフロア出席者としてワークショップに参加させていただきました。宗教心理学研究会には、一昨年の学会でお会いした松島さんのご紹介で入会させていただきました。私は、今後の研究で宗教性についても考えていきたいと思っておりますが、宗教心理学についてはいまだに初学者の域を出ておりませんので、今回のワークショップは大変勉強になりましたし、私自身の今後の研究の方向性について改めて考える機会

をいただくことができたと思っております。以下、宗教心理学のビギナーの立場からの拙い感想を述べさせていただきます。

まず印象的だったことは、今回のワークショップにおいても、藤島先生からは量的尺度を用いた測定学的な研究、川島先生からは語りによる質的研究、徳田先生からは臨床からの事例報告というように、異なるアプローチからの宗教心理学的研究がすでに着実になされてきており、これ

までの心理学の枠内には収まらない新たな知見が得られているということです。このような日本における宗教心理についての研究によって、これまでの西洋を中心とした(宗教心理学も含めた)心理学的研究では見ることができなかった新たなパーソナリティや人生観のあり方や、死生観を含めた生涯発達観、そしてスピリチュアリティの問題も包含した新しい臨床実践の手法が生み出されてくる可能性が豊富に秘められていると感じました。

また、このような宗教心理学的研究には、現代の心理学の潮流や時代の流れが非常にヴィヴィッドな形で関わってくるということも、先生方のご発表を通して感じたことです。宗教心理学という領域が今こうして改めて出てきたことは、決して古典的な宗教心理学のロマン主義的な復興ではなく、心理学やその関係領域における新しいパラダイムの隆盛(言語的転回やスピリチュアリティ概念への注目など)と、現代日本における時代的な要請(「スピリチュアル」という言葉の氾濫、新興宗教の問題など)とが相互に関連しあう中で生まれてきたのだと思います。そして、それだからこそ宗教心理学的な研究に携わる際は、新たな方

法論やものの見方を自覚的に敏感に取り入れつつも、地に足をつけた研究をしてゆく必要があり、それがワークショップの副題にあった「社会寄与」へとつながってゆくのだということを改めて教えていただきました。

私自身は、今まで「なぜ生きているのか」「なんのために生きるのか」というような人生の意味への問いについて、またそのような意味が充たされないことによる実存的空虚について、青年期を中心に研究を進めてきました。「究極的関心」というティリッヒの言葉を持ち出すまでもなく、人生の意味を問い続けていく先には、いわば当然の成り行きとして宗教やスピリチュアリティの問題が控えているといえます。今回のワークショップに参加させていただいたことによって、実は私自身も、宗教心理学が扱ってきた問題と非常に近いところで研究をしてきていたのだということを再発見することもできました。今後も、このような視点から、宗教心理学の分野に寄与できるような、そして社会寄与へとつながってゆくような研究をしていきたいと思っております。以上、まとまりのない感想文となりましたが、今後とも研究会などを通じてご指導いただければ幸いです。

企画者から

第4回研究発表会に参加して

松田茶茶(神戸学院大学大学院)

今回の研究発表会のサブタイトルである「心理学に根ざし、社会寄与を目指すには」、これに関しては、企画者として少々の後悔があります。何をどうすれば良かったのか、その話をここで始めると今以上の無知蒙昧を晒してしまうため控え、その後悔を次回への糧とすべく、精進の意を新たに致しております。そして何はともあれ、この拙い企画のもとに第4回研究発表会を無事終えることができましたのは諸先生方の温かいお力添え、お引き立てによるものと、まずは心より御礼申し上げます。

「社会寄与」と言ってもその範囲はあまりに広く、どのような場(領域)で、どのようなもの(知見)

が求められているか、またそれを導出するプロセス(方法論)はどのようなものが適切とされるのか、一度の会で全ての事象を網羅した提言をすることはほぼ不可能です。そのため今回は3領域(性格心理学、発達心理学、臨床心理学)より話題の提供をお願いすることとしました。もちろん、心理学はこの3つに収まるものではありませんが、ひとつひとつ、見える範囲、思いつく箇所から丁寧に紹介していくこともまた重要であると考えた結果です。

当初の企画内容は抄録集にも掲載されているとおりですが、筆者自身が最も重要視していたのは、「宗教心理学的研究」が心理学においてどの

ように構成されるか、という問題でした。あらゆる学問分野がそうであるように、心理学もまた単一の領域によって構成されるものではありませんが、その中で「宗教心理」が心理学のひとつの領域として存在し得るならば、「宗教心理学的研究」というものは、一般的とされている諸領域の何とどのような関係性をもちながら構成されるのか。これを大枠にでもつかめることができれば、という期待のもとに始め、3領域の先生方から、それぞれが異なる方法論を用いた、目的を異にする研究発表を頂戴することができました。

藤島先生のご発表中の、「高いコンセンサスを既得しているパーソナリティ次元と宗教・霊性次元との関連」、これは筆者自身にとっては非常に大きな関心を寄せているテーマであり、特に宗教とコーピングに関する研究などは、心理学の担っている「健康問題への介入」に対して果たす寄与が大きいと考えられます。そこで必ず問題となってくるのが、統計的な処理をおこなった際に算出される「数値」ですが、藤島先生はそこに触れ、数値の低さが何を意味するのか、ということを取り上げていらっしゃいました。これは統計的見地と理論的見地の双方より同時に解釈することの意義を示す、重要なご示唆であると受け止められます。

川島先生のご発表では「死後の理想世界」の語りの分析が中心となっていました。その結果提示に際して分析手順を発表資料中にお示し下さっていたのが、非常に有り難いプレゼンテーションであったと思います。量的分析と質的分析は常に相補的な関係性であることが望ましいものですが、いずれか一方に傾倒しているパターンが多いのもまた事実ですので、先の藤島先生のご発表と並べることができたことは、とても有意義なことであったと感じています。また、このような「死

後の理想世界」にまつわる語り、それに働きかける宗教の機能、これらに関する研究の最たる貢献先は「死の受容」という発達問題にあり、川島先生の仰ったような「困難な現状」ゆえに持し難きものでもあります。不可欠なものでもあります。

そして徳田先生からは「宗教と心理療法の使い分け」という、これまでの本研究会の研究発表会では触れられることのなかった、まったく新たな話題が提供されました。これは宗教心理学的研究の、臨床場面への寄与を具体的に示唆するものであったと思います。また、ご発表のまとめの部分では「...(前略)...向宗教性を高めるのではなく、加護観念を高めるように働きかけることが倫理的な問題が少ないのではないか」と述べられていました。どのような研究においてもそうですが、宗教に関連する研究では特に「倫理」が不可避免の問題となります。その点に関し、本発表会にて臨床心理学の立場から触れて頂いたことは貴重な警鐘であると感じました。

全体を通して見ると、まったく異なる領域の先生方から、それぞれの領域における宗教に関連する変数(要素)の意義や有用性をお話し頂くことが叶い、宗教心理学的研究がある一定の共通性をもつひとつの領域として、着実に発展しているという可能性を見出すことができました。

フロア参加者の一人としての筆者の感想を述べましたが、企画者の立場に戻りますと、当初の企画どおりに準備を進め、当日を迎えることができましたが、ご発表下さった先生方にはかなりのご負担をおかけしたのではないかと、今さらながら感謝と恐縮との念が募ります。今回得たものを活かすことのできるよう、次回研究発表会の企画へ向け努めてまいります。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第6号が発行されました。今回の内容は、第4回研究発表会報告と会員の方々からの研究発表会に対する感想となっております。今後、ニューズレターに取り上げて欲しい企画がありましたら、ぜひ事務局までご提案いただければ幸いです。

2007年度は、公開シンポジウム開催に向けて準備を進めて参りたいと考えております。心理学、宗教学のみならず社会学、看護学、社会福祉学など学際的な観点から広く宗教心理学的研究について議論する機会を持ちたいと考えております。具体的な準備は、8月頃から始めていきたいと思っておりますので、テーマ等をご提案いただければ幸いです。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2007年7月

宗教心理学研究会ニューズレター第7号の原稿依頼

ワークショップについて具体的な計画を立てる。適宜、話題提供者、指定討論者、研究会会員間の意見交換を行う

2007年8月

宗教心理学研究会ニューズレター第7号の構成・編集作業

研究会主催公開シンポジウムの企画立案

2007年9月18日(火)～20日(木)

(1)日本心理学会第71回大会ワークショップ(第5回研究発表会)開催予定[開催校:東洋大学]

(2)研究発表会時に、宗教心理学研究会ニューズレター第7号を発行、配付

2007年10月～11月

公開シンポジウム開催予定

発行: 宗教心理学研究会
編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/